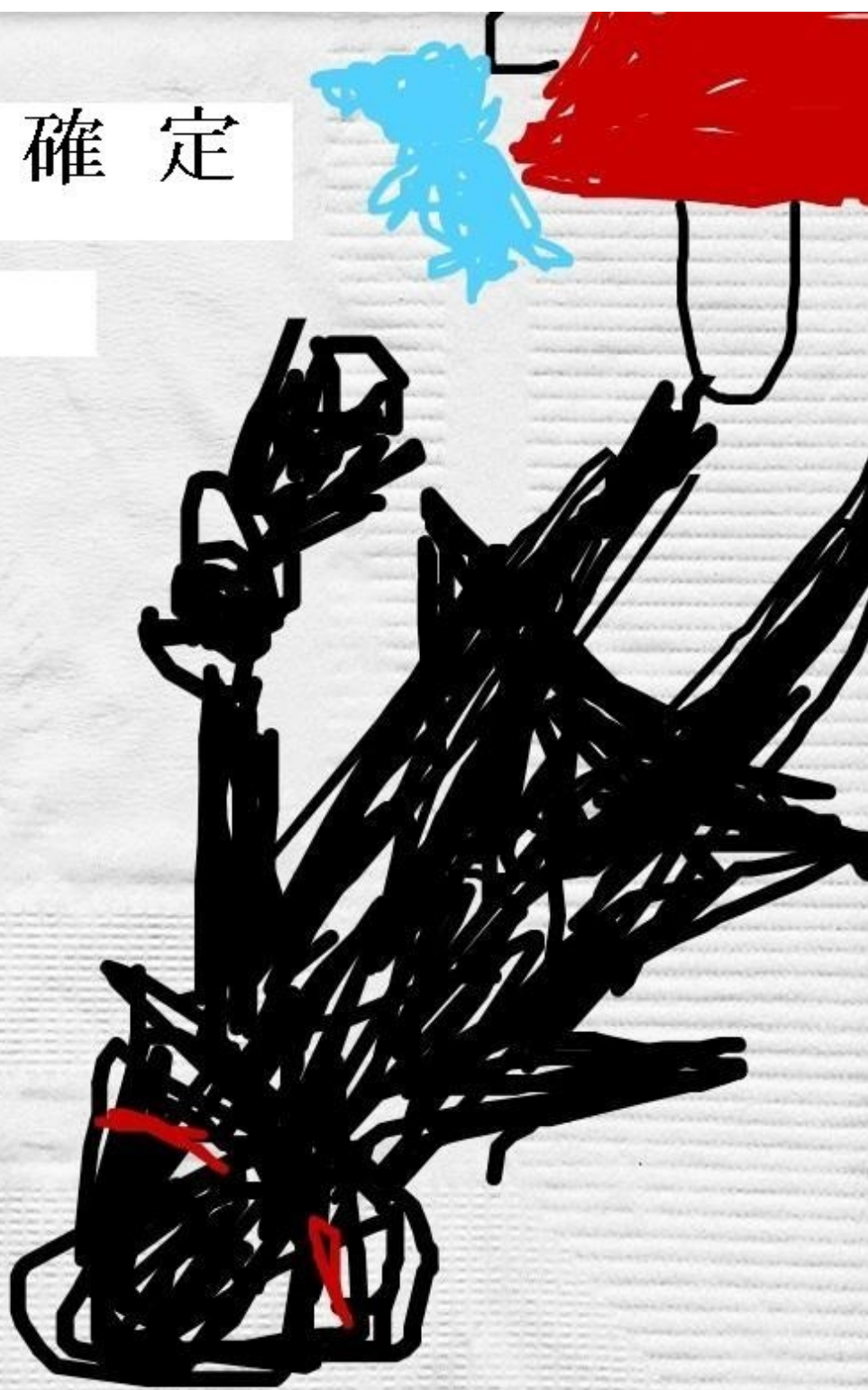


存在不確定

夜神石



1. 少年、Jポップに屈す
2. スイッチ
3. 人生の結末
4. コトシモ
5. ジミー・ザ・バンパイア
6. 欲情ジェシー（書き下ろし）
7. あとがき

少年、Jポップに屈す

ロックの好きな少年がいた。最近の流行のJポップに興味を示さない彼を周囲は不思議に思った。

「だって歌詞が胡散くさいじゃん？明日は晴れるとか、きっと大丈夫とか、どこにそんな根拠があるの？」少年は言った。

それからしばらくして、少年の妹が重い病気にかかった。

「先生、妹の病状はどうなのでしょう？助かりますよね？」少年の問いに医者は答えた。

「残念だけど、君の妹はもうそんなに長くないよ」

少年はその言葉にショックを受けたが、妹を不安にさせないために平静を装って妹の病室に入った。

「おにいちゃん、私はもう助からないでしょ...？」少年の妹は、少年に尋ねた。

「お前はきっと大丈夫だよ！なんの根拠もないけど、おまえは絶対大丈夫だ！！」

言いながら少年はぼろぼろと涙をこぼしていた。自分が間違っただけを言っているとは、一切思わなかった。

スイッチ

ある晴れた秋の日、僕は近所の公園で、自分で作った爆弾のスイッチを手にしていて。爆弾を仕掛けたのは僕が卒業した中学校。僕は、その中学校に通ってる間、さんざんいじめられていた。その事が原因で、僕は人が恐ろしくなった。だから、僕の人生がうまくいかなかったのは、すべてあそこのせいなんだ。だから、あんな所なんてなくなってしまえばいい。多くの人が死ぬ？関係ないよ。けど、お母さんは僕が犯罪者になったら悲しむかな…

何を躊躇しているんだ。押してしまえ、そう思ってスイッチに指を伸ばしかけたその瞬間、向こうに人のいる気配と物音がした。「なんだろう？」と思ってそっちの方に行ってみると、今まさに自分好みの美少女が首を吊ろうとしていた。

「ちょ、君、何をしているんだ！！」

僕は彼女に後ろからタックルした。僕と彼女の身体は踏み台から落ち、彼女の豊満な胸が地面が押し返すのを背中ごしに感じた。

「いったあい、何すんのよ！！」彼女が叫んだ。

「何って君、自殺…」

「関係ないでしょう！！私なんて、この世からいなくなった方がいいのよ！！」

僕はさっきまで人を殺そうとしてた事などすっかり忘れてこう言った。

「捨てていい命なんてひとつもないんだ！！君が誰にも必要とされてないなら、今日から僕が必要とする！！」

こうして、僕は爆弾のスイッチを押すのをやめた。しかし、僕の心には、別のスイッチが入った。いいんだ、復讐するよりも、もっと素敵な事を見つけたから。

人生の結末

何をしたのか覚えていなかった。安子の手握られたカッターナイフの刃先からはポタポタと血が滴り、目の前には夫の郁夫が血だらけで倒れていた。触るとまだ生暖かい体温が残っていた。

ふと窓をみた。空がだんだん白くなって来ていた。一人の人生が断たれているのに、時間はそんな事おかまいなしに流れている事に違和感を覚えた。安子は愛人の次郎に電話した。

「とりかえしのつかない事をしてしまったの…お願い、すぐ来て…。」

しばらくして駆けつけた次郎は惨状をみて愕然とした。

「僕が殺した事にするよ…。」

「やめて、やめて。そんな事私が耐えられない。」

結局二人で人里離れた山奥に死体を埋めた。帰りの車で次郎は安子にいった。

「こんな事になったのは、僕が君を追い詰めたからだ。」安子は必死で返した。

「違う…。そんな事ない…。私が全部悪いの…。」

次郎は言った。「とにかく、ばれるばれないにかかわらず、僕達はこれから重い十字架を背負って生きるんだよ。」

安子はそれには答えず、黙って車の背もたれに身体を預けた。窓を見ると景色が前から後ろに流れていた。幸せな人生の結末などこの世に存在しない気がした。

次郎にはその後、安子に別れを告げた。この事件が相当後ろめたかったのか、それとも、そのうち自分も殺されると思ったのか。

「でも、私は一人じゃないわ。ねえあなた？」

そう言って安子は冷凍庫の扉をあけた。そこには郁夫の死体から切断されたある部分が保存されていた。

2010年年末、M-1グランプリが、10年の歴史に幕を閉じた。そして迎えた2011年、かくし芸大会も、欽ちゃんの仮装大賞ももう存在しない。谷啓の銅像ネタなど、もう遠い昔の出来事だ。

「今年も、いっぱいきたなあ〜」

届いた年賀状を眺める。相手の住所も氏名もかいておらず、相手のハンドルだけが書かれた年賀状が最近目だってきた。そう、mixi年賀状だ。携帯がなる。友人からのデコメだ。最近はメールで新年の挨拶を済ます人も多い。

お正月のスタイルが年々変わり、その度に、お正月気分というもの、薄くなっている気がする。明美はテレビ欄をみた。「新春SP」という単語はとりあえずつけているものの、どれもこれも、特別新春にやらなくてもいいような内容だ。

TVを見るのは諦めて、初詣に行く事にした。自宅にほど近いこじんまりとした神社でおみくじを引く。中吉。今のパツとしない自分にちょうどいい運勢だ。ところで、恋愛と待人の運勢をわけける意味ってあるのだろうか。待人など好きな人以外の何者でもないだろうに。

そのパツとしないおみくじをご神木にくくりつけた後、自宅に帰る途中で、明美は同じアパートの3階に住む正に偶然あった。

「あ、明けましておめでとうございます。今年もよろしく。」

「こちらこそ」

二人は挨拶しあった。

明美は正に恋をしていた。本当は”今年も”なんて言いたくない。本音を言えば、”今年は””今年こそは…”だがやはり、”今年も”今までと同じ状態が続くのだ。

家に帰って、明美はパソコンを立ち上げた、Twitterの画面に「2011年、兎年…ウサギって、寂しいと死んじゃうらしいよ」と打ち込んでみる。ふとフォロワーを見ると、もう800人超えていた。もちろん、全員の素性なんて知らない。

この800人の中にはもしかしたら身近な人が混じってるかもしれないし、そうでないかもしれない。

そんな事はどうでもいい。このタイムライン800人の中の、あなたに、あなたに、あなたに…届け、このメッセージ。私の日常を。

喜びや憤りを。

明美は送信ボタンを押した。

その時、正のiPhoneのTwitterの画面には、明美のツイートが写っていた。お互いにフォローをしている事実に、二人はまだ気づかない。

*注・・本文中、仮装大賞がもう放送していないという記述がありますが、実際はまだ放送中でした。

あえて、twitter投稿時のままの文章にしてあります。

ジミー・ザ・バンパイア

昔々、ある丘の上の小さなお城に、ジミーというバンパイアが住んでいました。ジミーはお城にやってくる旅人や、町の人を夜な夜な襲って命をつないでいました。

そんなある日、お城にアンジーという美しい旅人が迷いこんで来ました。

「どうかここにしばらくおいていただけませんか。行くあてがないのです。」

”かわいそうに、食料にされるともしらないで”

ジミーはアンジーをお城の中にいれました。

アンジーはとてもきだてのいい子で、料理、掃除、洗濯とおうちの事はなんでもこなしました。

ジミーは”この子にはもう少し働いて貰おう”と思い、血を吸う事はやめました。

ある日アンジーはジミーに聞きました。

「なぜ、あなたは昼間は部屋に閉じこもってでてこないのですか？」

ジミーは答えました。

「それはね、昼間は部屋で仕事をしてるからだよ」

アンジーは不思議に思いました。

「でも、食事もとっていないじゃない」

ジミーにはそんな生活が長く続かない事がわかっていました。

ジミーはこの所長い間、人間の血を吸っていません。

町に出て人を襲うより、アンジーと少しでも一緒にいたかったのです。

幸せな日々にも限界が来ました。

「そうだ、いっそアンジーの血を吸ってあいつも吸血鬼にしてしまえば、永久に一緒にいられるじゃないか...」

ジミーはそう考えました。

意を決してその夜ジミーはアンジーに襲いかかりました。

「君のためだ、こうすれば僕たちは一緒にいられるんだ...」

そうやってジミーはアンジーの首に牙をたてようとしてました。

しかし、結局ジミーはアンジーに噛みつ়く事はできませんでした。

「やはり僕にはできない。命は限りがあるから美しいんだ。僕は君からそんな美しいものを奪う事ができない。」

そうしてジミーはアンジーを抱きしめたあと、牙とは違うものを刺しました。

何度も、何度も、何度も。

やがて朝が来て、部屋に朝日が刺しました。

朝日を浴びたジミーの体はじょじょに灰になりかけました。アンジーは青くなって

「いやです、いかないでください」

と懇願しました。

「僕はこうして、君と朝日を見るのが夢だったんだ」

ジミーはそう言って、姿形を失いました。

それから何ヶ月かして、アンジーのお腹はだんだん大きくなってきました。

アンジーは、ジミーの子を身ごもっていたのです。

欲情ジェシー

僕の家には、金髪で青い目のメイドロボがいる。

「ごめんなさい、ユーヤ。また失敗しちゃったわ。」

ジェシーの差し出した皿の上には、黒コゲになった卵焼きが乗っていた。

「また、派手にやっちゃったね。」そうやって僕はジェシーの作った味噌汁に口をつけた。

「……………！！この味噌汁も、苦いよ！！もっと薄めにして前言ったじゃん！！」

ジェシーはすまなそうな顔をする。

「ごめんなさい、ユーヤ。私原産国がアメリカだから、和食は苦手で…」

「その割には、日本語が悠長じゃないか」

そんなツッコミをいれながらも、僕にはジェシーが家事が苦手な訳がよくわかっていた。

ジェシーは実は家事の為に作られたメイドロボではない。

ジェシーの本当の製造目的は性欲処理…つまり、セクサロイドだ。

その事を彼女はまだ、知らない。僕達はまだ”そういう行為”は致していない。

え？セクサロイドなんだからつべこべ言わずに押し倒しちゃえばいいんだって？

そんな事、できないさ。

だって、普通の女の子にだって何も手がだせないのに、普通の女の子そっくりに動くロボットに手なんか出せるわけがないだろう。

僕は、このナイスバディーなお馬鹿さんと、もう一年もこうやって悶々と過ごしている。しかも、ジェシーには4年間という使用期限がある。何故4年？大方、作った人がブレードランナーにでもかぶれていたんだろう。

だが、今まではあくまで主人とメイドの関係だったけど、今日は、今日はクリスマスイブなんだ。相手がロボットだっていいさ。独りで過ごす夜なんて、嫌だ。きっと今頃、日本中のカップルがお楽しみの真っ最中なんだ。

その夜、ジェシーは一人でテレビを見てた。ロボットにテレビの面白さなんかわかるんだろうか？そして彼女の細い首や、肩や、腰を見て僕は欲情した。

今日こそは君を後ろからはがいじめにして、押し倒して…。そう思った矢先にジェシーが振り返った。

「どうしたの？ユーヤ？」

…やっぱり、手がだせなかった。

「いや、その服…もう飽きたろうと思って。明日新しいの買ってやるよ。クリスマスなんだし。」

何を言っているのだろう。俺のバカ。

「いいのに、私はロボットなんだから、汗もかきませんし、汚れませんよ？」

「ご主人様の言う事は、素直に聞いとけ」

「なあ。」僕は買ってきた紙袋からワインを取り出していった。

「一緒に、乾杯してくれないか…」「私、人間じゃないから飲み物は」「乾杯だけでいいんだ」
そうしてひとしきり酔いつぶれた僕を、ジェシーは寝室まで運んだ。
半分意識のない僕の頬にジェシーはキスした。生命というものを持ち合わせていないジェシーの唇からは体温を感じなかった。

窓の外はクリスマスらしく、一面、美しい雪景色だった。

「ユーヤ、ほら、今日凄い雪が綺麗ですよ。」

ジェシーの使用期限まで、後3年。

あとがき

どもども。夜神石です。こんにちわ。はじめましての方ははじめまして。

2010年8月、突然思い立ってtwitterでつらつら物語のようなものをつぶやきだし、そしてtwitterでの縁があって、パブーさんで第1作、「絶命小説」を発表するにいたりましたが、これが結構反響ありまして、「次回作いつですか！！」なんてリプライを貰ったりして、人生ってわかんないものだなあと感慨にひたっています。

さてさて、「絶命小説」というタイトル通り、主人公及び主要登場人物がみんな絶命してしまう内容の話ばかりだった前作に比べ、今作はもう少しソフトな味わいになりましたが、全て「現世にはっきりと自分の価値を見出す事のできない人達」が主人公であるゆえ、「存在不確定」というタイトルにさせていただきました。

表紙もあいかわらず私が書いたヘタクソで不穏なイラストです。物書きとしてはまだまだスタートを切ったばかりのところで、いろいろと稚拙な所もございますが、読んで感想などいただけると幸いです。

では、みなさま3作目でまた会いましょう。

あなたに素敵な絶望を。

夜神 石（またの名を夜神右）

幸福の触感、絶望の嗅覚

<http://p.booklog.jp/book/17582>

著者：夜神石

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yagamiright/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17582>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17582>